

サンドイッチになっている。パンの部分も具の部分もそれぞれ刺激がありおいしく頂けるが、やはりサンドにして召し上がれ。おいしさのレベルがもう一段あがると思います。

生方史数編、『森のつくられかた—移りゆく人間と自然のハイブリッド』共立出版, 2021年, 234 p.

竹田晋也*

ユニークなタイトルの本書は、森を自然と人間がつくる「ハイブリッド（混成物）」としてとらえ、そのハイブリッドの生成、変容、崩壊のプロセス自体をみつめることによって、森の「レシピ」の再考を試みている。社会構成主義やアクターネットワーク論の延長線上で「森のつくられかた」を考えてみようという試みだ。

20世紀に入ってから「グレート・アクセラレーション」と呼ばれる自然と社会経済指標の急激な変化は、「プラネタリー・バウンダリー」という地球の限界を人類が超える局面にまで達しつつあり、人新世という地質年代区分が提唱されるほどに人類の影響は地球の隅々にまで及んでいる。本書では、編者ら執筆陣が研究対象としてきた森林を「人と自然がつくりだしたハイブリッド」としてとらえなおし、新しい観点から考察を試みようというのである。まずは構成に沿って各章を紹介したい。

第1章「森のつくられかた—ハイブリッ

ドとしての森林」（生方）では、近代哲学における自然と人間の二元論をデカルトまでさかのぼり、そこから社会構成主義に至る履歴を辿って本書の理論的な前提を紹介したうえで、自然と人間のハイブリッドという森林のとらえかたと本書の構成を説明している。本シリーズの解説書的な性格上、「ある特定地域の森林を対象にして、歴史的にそのプロセスを明らかにするような綿密な事例研究としてのスタイル」（p.5）はとらず、むしろ森林がつくられるプロセスを記した「レシピ本」のように記述していくとする。

第2章「森を認識する—森林とは何か？」（生方）では、個々人が抱くイメージとしての「森」と合理的な基準で定義された「森林」を対比させながら、森林がどのように認識され、社会集団によって共有されるのかを説明している。さらに住民・行政官・科学者の間での基準の「ゆらぎ」や認識の「ずれ」の具体例をあげて、認識の実態化と矛盾を考察している。

第3章「森の彼方を見る—近代化以前の山村を見るまなざし」（葉山）では、秋山郷や椎葉村の記録に触れながら、現代では忘れ去られたかにみえる山村をもう一度「認識の内」にすることを試みている。歴史を振り返ることで、豊かな山村像、山地理解を取り戻そうというのが3章の眼目で、平地の人々、すなわち都市住民が、森林と山村をどのように文化的に認識してきたのかを辿る。そして民俗学者の谷川健一の「自らの手で獲得した理由によってのみ、人はその土地と必然的なかわりをもつことができる」（p.64）とい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

う引用で締めくくっている。

コラム1「森とつながる文化」(小林)は、カンボジアとミャンマーの例から自然とのつながりを紹介している。近代的で合理的な世界観のなかで生きようになったカンボジアの人たちは、「自らを包む〈生命〉の環のなかでつながっているという意識」(p. 68)をもたなくなった。ミャンマー・カチンの森も〈生命〉の循環の出発点であり、終着点である。「カチンの人々と我々の違いは、その〈生命〉の連鎖と循環の意識が森にまで届いていないこと」(p. 70)でありこの「近代的な世界観と異なる視座があったことを思い起こす努力」(p. 71)が必要であるとする。

第4章「森を区切り、所有する—ラオスと日本における領域化」(百村)では、「森林関連法令によるラオス全国レベルでの森林区分の確定とその領域化」、「土地森林分配事業による村落レベルの土地森林区分の確定と領域化」、「REDD プラスによる森林の領域化」と順を追ってラオスにおける森林の領域化を途上国の例として紹介している。さらにそれと対比させた先進国の例として日本における所有者不明土地問題を不完全な領域化として取り上げる。旧来の所有・利用関係を現代的な関係に変えようとする過程では、小繋事件に代表されるように地元住民を困難な立場に追いやる「区切ることのデメリット」が顕在化する。参加型開発の分野で重要視される地元の声に耳を傾ける姿勢が大切であると指摘する。

第5章「森に科学を導入する—科学的林業・森林管理とその現地化」(生方)では、

森林科学が東南アジアでどのように現地化されたのかを検討する。現地の自然・社会という基礎の上に、林野の所有制度がのり、その上に植物利用を調整する技術が存在するという三層構造のもとで現地化が進んでゆく。西欧の制度や技術の影響を受ける前に利用規制や民間の育成林業が自生的に発展していた日本に対して、東南アジアでは在来の木材市場や育成林業の技術体系は発達していなかった。そして国有林とコンセッションで森林を画一的に囲い込む林野制度は、在来社会と整合性のあるリンクを創出することができなかった。ここから得られる教訓は、「科学や技術を機能させるには、それらが現地の自然だけでなく、社会（や市場）とも整合的にリンクされていく必要がある」(p. 116) こととし、「自然や社会がどうあるべきかという規範的・倫理的な議論を避けることができない」(p. 117)と指摘する。

第6章「森を開発する—マレーシア・サバ州における森林開発とその後の森のゆくえ」(内藤・生方)では、サバ州の森林開発の歴史を概観したうえで、森林からアブラヤシ園への転用の担い手と制度、開発後のプランテーションと残された森の双方における状況を紹介している。木材ブームとアブラヤシへの大規模な転換を経験したサバ州の開発の歴史のなかで、変わりゆくものと変わらないものが考察される。まず開発の担い手が大企業や支配階層であることは変わらない。そして自然を切り売りするコンセッション・システムがレント（超過所得）を生み出し、森林を荒廃改変してきた。そのコストは、植民地

時代から先住民や地域住民に押し付けられてきた。また森林開発に関連する制度を操作してレントを支持層に配分しようとする政治も変わらない。このようなハイブリットの頑健性は今後も継続すると予想される。

第7章「森に環境価値を付与する—グローバルな環境主義が変える森林のあり方」(生方・内藤)では、日本の里山とインドネシアの泥炭湿地林を事例にして、森林から得られる便益の認知には、「資源から環境へ」「ローカルからグローバルへ」という2つの変化があると整理する。里山と泥炭湿地林へ向けられるまなざしの変化は、「資源から環境へ」と共通する。一方で異なっているのは、泥炭湿地林では国内外のエリートのグローバルなまなざしが支配的であるのに対して、里山では地域住民・市民・自治体・企業といったローカル寄りのアクターの影響が大きい。「グローバルな環境問題への対処という大義名分が、問題の責任を問えそうにない一般の人々の生活を抑圧する行為につながってしまう可能性」(p.163)があることには留意が必要であり、「持続可能な社会の形成」への視点が重要であるとする。

第8章「森を『資本』にする—経済的アプローチと森林保全」(生方・百村)では、森林を便益が得られる自然資本とみなして、経済的なインセンティブによる保全を概観する。そのうえで、PFES(森林環境サービスへの支払い)とREDDプラスの例が考察される。ベトナムのPFESとカンボジアのREDDプラスに共通するのは、現場から遠いアクターの関与が強まっていることであ

る。グローバル・アクターの関与や国家の監視が強まるなかで、現場の声が弱まってしまいうことがとくにベトナムの例では危惧される。一方でカンボジアの例では、住民への利益配分やその用途への配慮がみられる。このように自然を資本や商品に転換するとき、現場の声を反映できる技術や制度デザインをどのように構築できるかが大切になってくる。

コラム2「森と里山の価値が失われる—原発事故と森林」(満田)は、東京電力福島第一原発事故がもたらした多岐にわたる深刻な被害を地元の声も交えて伝える。福島県の総面積の7割は森林でクヌギやナラなどの広葉樹林の割合が高く、しいたけ原木、薪炭材、山菜やきのこといった山の幸を生み出す里山が地元の人々の暮らしと密接にかかわってきた。避難住民が「人間は、衣・食・住だけで生きているわけではない。人間が人間として生きているその土台がなくなってしまったのです」(p.200)と語るほどに、事故の影響は計り知れない。そしてもとの森林と暮らしを取り戻す短期的な解決策はない。「復興と再生を急ぐのではなく、時間をかけて、地域の人たちが計画に参加する形での、森林・里山や暮らしの再生が望まれる」(p.204)と結んでいる。

第9章「森のよりよい共創に向けて」(生方)では、「レシピ本」として書かれた本書の「食後の反省会」として、森がつくられるプロセスを「認識と社会化」・「制度化」・「働きかけと相互作用」の視点から再整理したうえで、そこから零れ落ちたものを確認して「改善」のために何が必要なのかを考察する。

零れ落ちたものは、1) 自然の論理、2) 場所性、3) 参加と民主主義であるとする。そのうえでハイブリッドとしての森林のゆくえには、1) 近代化で発展させてきた制度や理念をさらに徹底させる路線と、2) これまでとはことなる要素を入れ込む再構築路線の2つのやり方があるが、いずれにしても何のために「森のつくりなおし」をするのかという規範的な問いに答えるものである必要があると指摘する。最後に森の共創へ向けた再構築路線の指針が「零れ落ちた要素とそれらの導入指針案」という表にまとめられる。

以上のように本書は、ハイブリッドとしての森林という一貫した切り口で、さらに各章の議論がうまくつながっていくように構成されている。紙面の制約があり、詳しく振り返ることはできないが、各章は「ハイブリッド」としての森林を考えなおす糸口を提示し、それぞれに示唆的で今後の展開や着想を促す内容となっている。

最終章で、「本書は『森のつくられかた』の半分しか語っていない。残念ながら著者の能力的な問題で背景に迫いやられてしまっているが、相互作用の相方である自然の『声』をきく必要があることは明らかであろう」(p. 227) と述べられている。たしかに「移り行く人間と自然のハイブリッド」を副題とする本書で、自然としての森の実態についてほとんど触れられていないのは残念である。しかし本書は全13巻構成の「森林科学シリーズ」の第2巻として刊行されたもので、ほとんどが自然として森林を扱っているシリーズ全体のなかでの役割は、ハイブリッド

を人間の側から語ることであり、その意味で十分にその責務を果たしている。むしろ人間ばかりに焦点をあてる人文・社会科学分野の研究者に、捨象することのできないハイブリッドとしての自然の重要性を再認識させる解説書になっているとも思える。

水野〔2020: 62–63〕は、近代ヨーロッパ諸帝国と科学との関係に関する研究の動向を踏まえて「帝国林学ネットワークと在来知」を論じたなかで、「帝国林学とは、ヨーロッパ林学が派生したものというよりも、各地の実践に立脚したさまざまな林学モデルが森林管理官のネットワークのなかで交換され、相互に影響しながら構築されていく『ハイブリッド』なものとしてとらえることができよう」と述べている。ここで「各地の実践」はじかに自然と向き合うものであったため、否応なく自然の声が反映されている。人新世の森の共創においても、各地で進められている実践をつぶさにみつめ、そこに参加することで「自然のリズムや状況に合わせた工夫」が組み合わさっていくだろう。森林がつくられるプロセスを記した「レシピ本」である本書を出発点として、「ある特定地域の森林を対象にした綿密な事例研究としてのスタイル」での自然と人のハイブリッド研究がさらに進むことを期待したい。

最終章となる第9章の冒頭に「地球に降り立つ」〔ラトゥール 2019〕という言葉が掲げられている。では「地球に降り立つ」にはどうすればよいのであろうか。ラトゥールは、私たちが近代の終わりに行きつく場所として「テレストリアル」を想定し、生産シス

テム (system of production) に焦点をあてるこれまでの方法ではなく、発生システム (system of engendering) に焦点を移行させ、人間だけにエージェンシーを付与するのではなく、事象を引き起こす能力をもっているあらゆる地上的な存在と依存しあって一緒に暮らしてゆく道を模索することについて議論を進める。そして地球の表面の生物圏であるクリティカルゾーンの科学の重要性を説く。これはラトゥールのあくまでも哲学的な思索とそこからの提案である。しかしたとえば、いまも拡大する新型コロナウイルス感染症だけを考えても、あらゆる地上的な存在と依存しあって一緒に暮らしてゆく道しか選択肢がないことは容易に理解できる。

「再帰的なプロセスが森林や社会にどのような影響をあたえるのか」を検討するには、本書の枠組みのなかの想定されている「自然のプロセス」が重要となってくる。森の共創へ向けて「人新世の時代には、極端な設計主義は傲慢であり、極端な不介入は無責任」(p. 228) であり、「自然による創造や破壊に委ねる仕組み」として整形庭園 (formal garden) ではなく風景式庭園 (landscape garden)、身近にあって自分の意のままにならない疑自然的な日本庭園の発想がヒントになるとする。最後に引用されている夏目漱石

「夢十夜」にならえば、自然を彫り上げるのではなく、すこし力を抜いて自然の力を活かし委ねて掘り起こすことになるのだろうか。

原発事故で被曝した里山の復興と再生に辛抱強く時間をかけて向き合う態度は、人新世の森の共創にも求められる。外挿法で未来を予測して落胆し挫折するのではなく、現場主義で、あえて楽観的に、どこかに明るい出口を探してゆく。本書の「指針案」にもある「モノの会議」とは、知恵をもち寄るひらかれた寄合のようなものであってほしい。そうすれば意外な答えを、現場＝フィールドで掘り起こすことができるかもしれない。その可能性はこれからの地域研究にも共通する。

人新世の難題を抱える森林とは、さまざまなものが依存し合う関係性の総体だ。本書はそれをみるマクロスコープとして全体の見取り図をしめし、森林と人間のよりよい関係を再構築していこうとする関係者に新たな視点を吹き込んでいこう。本書の誕生を喜ぶたい。

引用文献

- ラトゥール, ブルーノ. 2019. 『地球に降り立つ—新気候体制を生き抜くための政治』川村久美子訳, 新評論.
- 水野祥子. 2020. 『エコロジーの世紀と植民地科学者』名古屋大学出版会.